



源氏物語に見る医療行為

榊会理事 北川 徹

「いづれの御時（おほんとき）にか、女御（にょうご）・更衣あまたさぶらひ給（たま）ひけるなかに、いとやんごとなき際（きは）にはあらねど、すぐれてときめき給ふありけり。〈どの帝のご治世のころかははっきりとはしないが、女御・更衣（ともに天皇に仕えた女官で、皇后・中宮の下位に当たる）が多数帝のおそば仕えていらっしやっていた中で、ことさら身分の高い人ではないが、大層帝から寵愛を受けていらっしやる方がいた。〉」頭の片隅に記憶として残っていらっしやる方も多いかと思います。昨年放送されたNHK大河ドラマ『光の君へ』の主人公紫式部が著した『源氏物語』の冒頭の有名な一文です。ご存じのとおりこの帝（桐壺帝）の寵愛を一身に受けたのは、光源氏の生母、桐壺の更衣です。結果として帝の寵愛を一身に受けたことで他の女御・更衣の反感を買い、それが原因となり重い病に罹って実家で加持祈禱を受けることとなります。

平安時代（西暦794～1185年）の医療行為のひとつの加持祈禱・呪術とはどのようなものでしょうか。加持祈禱・呪術を専らに行ったのは「験者（げんざ）」「陰陽師（おんみょうじ）」と称される特別な人物でした。繁田真一氏の論文『平安貴族社会における医療と呪術』によると、「呪術は医療の有効性および安全性を保障・保証するものと見做されてもいた」「医療と呪術とは相互に排除し合う関係にあったのではなく、いずれもが有効な治療手段として認識されていた」ということです。

『源氏物語』には多くの女性が描かれていますが、その一人に若紫（のちの紫の上）という女性がいます。光源氏が18歳の時に出会った女性で、「つらつきいとらうたげにて、……髪ざし、いみじうつくし。〈顔は実に可愛らしく、……髪の具合も、すごく美しい。〉」「ねびゆかむさま ゆかしき人かな 〈成長したあとで見てみたい人だ〉」と初めて見たときから光源氏の心をぎゅっとつかむ魅力を備えた幼女でした。若紫との出会いは、光源氏が罹患した「瘡病（わらわやみ）」〈周期的に発作の起こるマラリヤ風の病気〉の療養のために、都の北に位置する北山に病気をよく治すといわれている僧を訪ねていった際のことでした。さて、その僧から光源氏が受けた治療ですが、「さるべきもの作りて、すかせたてまつり、加持など参る〈護符を作って、それを飲ませて、加持をする〉」というものです。「護符」とは、今もある守り札のようなものと思われます。紙に経文などを書いたものだと思います。それを薬のように服用したのでした。先進医学の科学的な治療を受ける機会がある現代では、非科学的と一笑に付されてしまうでしょう。しかし、先ほど紹介した論文にあるように加持祈禱・呪術で治ると信じ込んでいた当時の人々には支持されていたのです。「病は気から」といいますが、神経系が免疫系に対して何らかの調節作用を有していることは古くから指摘されていますが、大阪大学免疫学フロンティア研究センターの鈴木 一博准教授らの研究グループが、交感神経が免疫を調節する分子メカニズムの一端を解明したとのことです。（2014年11月に発表）今後、さらに研究が進むと思います。「病は気から」にもさらに科学のメスが入り、非科学的なものから科学的なものへと変貌するかもしれません。そして病気治療に科学的な根拠に裏打ちされた、精神的な療法も一般的に取り入れられることになるかもしれません。

